

# 群萌の一乗

寺川俊昭

一

親鸞が浄土真宗と表白した仏道、すなわち浄土真実の教行証が、彼が「無碍光如来の名を称す」と定義した「大行」をその礎石ともいうべきものとしてもつことは、「行巻」の顕すところからも明らかに知られる通りである。もとよりこの「称無碍光如来名」は、ひとえに『論註』の讃嘆門釈の言葉に依っているものであり、したがって「称名」という行爲あるいはむしろ事実のもつ深い意味を「大行」と捉えるについては、曇鸞の指南に依るところが決定的であるというべきであろう。しかしながらそのことに先立って、親鸞が「無碍光如来の名を称する者」として尽十方無碍光の中に新生したのは、選択本願の念仏を往生浄土の行として語り続ける法然の教説との値遇を、決定的な縁としていえることはいうまでもなく、このことはいくら強調しても強調し過ぎることはないと思え、私は思う。親鸞自らこのことを「行巻」には、「しかるにこの行は、大悲の願より出でたり」と述べ、「信巻」には「この心すなわちこれ念仏往生の願より出でたり」と語っている。称名がその根拠とし、またそこにおいてはごくまれる「大悲の願」とは、諸仏称名の願の成就の事実を指しているにほかならず、それは『大経』が「十方恒沙の諸仏如来、みな共に無量寿仏の威神功德不可思議なるを讃嘆したまう」と語る、まさにその出来事であるけれども、肝心なことはこの教説は、親鸞が

それに値遇し、そして親鸞をはぐくんで、無碍光如来の名を称する者、たらしめた、念仏往生の一道を語り続ける法然の現在前の根源的意味を説くものであることに、思いをいたすことである。同じ感慨を託して、この無碍光如来の名を称する身となった内面に開かれた、無碍光如来に帰命する、自覚を、「念仏往生の願」を根拠とする信仰的自覚であると親鸞は語っている。自らの己証を語れば当然、信心発起の根源を「至信心樂の願」といふべきところを、敢えて法然のすぐれて個性的な本願理解を表わす「念仏往生の願」という願名を掲げて、信心の根拠である願心を語るところに、親鸞自身の行信の獲得が、法然の篤い教恩のもとにあることを述べてはおられないものがあったことが、よく示されているように思う。このような縁を得て、念仏する仏者親鸞が誕生したからこそ、彼は終生その師法然に篤い謝念を捧げ続けたのである。

慶ばしいかな、心を弘誓の仏地に樹て、念を難思の法海に流す。深く如来の矜哀を知りて、良に師教の恩厚を仰ぐ。慶喜いよいよ至り、至孝いよいよ重し。(真宗聖典四〇〇頁)

この深い恩徳感を、さらに『尊号真像銘文』によって、今一度確かめておきたい。

「情思教授恩徳、実等彌陀悲願者」というのは、師主のおしえをおもうに、弥陀の悲願にひとしとなり。大師聖人の御おしえの恩おもくふかきことをおもいしるべしとなり。「粉骨可報之摧身可謝之」というのは、大師聖人の御おしえの恩徳のおもきことをしりて、ほねをこにしても報ずべしとなり。身をくだきても恩徳をむくうべしとなり。(真宗聖典五三〇頁 註、大師聖人は法然を指す。)

この念仏する仏者に行ぜられる称名の深い意味を、「往生浄土の行」として明らかにしたところに、善導の伝統がある。

「南無」と言うは、すなわちこれ帰命なり、またこれ発願回向の義なり。「阿弥陀仏」と言うは、すなわちこれ、その行なり。この義をもつてのゆえに、必ず往生を得、と。(真宗聖典一七六頁)

『選撰本願念仏集』源空集に云わく、南無阿彌陀仏往生の業は念仏を本とす、と。(真宗聖典一八九頁)

南無阿彌陀仏と大らかに念仏する者となつて、この伝統に棹ざしたところに、仏者親鸞の初心があった。その親鸞がやがて曇鸞の『浄土論註』の指教を得た時、称名をもって往生浄土の行としたその念仏の意味把握はさらに根源化した、称名において称念される名号をもって直ちに、衆生を「大般涅槃道」に立たしめる法であるとしたのである。そのような名号の意味把握の見事に洗練された表現を、例えば晩年の著作『唯信鈔文意』に、私は見る。

この如来の尊号は、不可称・不可説・不可思議にましまして、一切衆生をして無上大般涅槃にいたらしめたまう、大慈大悲のちかひの御なり。(真宗聖典五四七頁)

そして名号の意味がこのように把握されることと呼応して、この名号を称念する「称無碍光如来名」の積極的意味が、  
// 大行 // として顕揚されていったのである。そこにはこの称名において実現するものが、「極速円満す、真如一実の功德宝海なり」と明確に覚知されており、この名号の意味把握の根底にあるものが、『浄土論』に極めて感銘深い言葉で教説されている、浄土の功德の根本ともいふべき不虛作住持功德の自証であることを、はっきりと告げている。重ねて注意すべきは、このような名号の意味把握は少くとも親鸞のそれにおいては、ひとえにこれ名号に帰した自覚、すなわち一心帰命の信に自証せられる覚知の自覚化であつて、それを離れた単なる名号の解釈ではないということである。こうして今の『唯信鈔文意』における名号の意味把握を根拠づけるような名号解釈が、『一念多念文意』に次のように、展開する。

真実功德ともうすは、名号なり。一実真如の妙理、円満せるがゆえに、大宝海にたとえたまうなり。一実真如ともうすは、無上大涅槃なり。(真宗聖典五四三頁)

名号においてはたらくもの、それが名号に帰した端的の回心懺悔に覚知される自己の穢悪汚染、虚偽諂偽なること、すなわち虚仮不実性の自覚を踏まえて、「真実功德」と自証されている。言葉を換えていえば、本願の名号を法とし

てそこに現前するはたらきが、真実功德と表白される無上涅槃の功德である。これが取りも直さず、親鸞が独自に了解した「回向」の内実にはかならない。「行巻」の根本命題である、「大行とは、すなわち無碍光如来の名を称するなり。この行は、(乃至)極速円満す、真如一実の功德宝海なり」は、このような覚知の凝集的表現であり、親鸞が「浄土真宗」と表白する仏道のすべてを支える、自覚的立脚地である。

一一

この大行の上に展開する仏道を、親鸞は満々たる自信を託して「誓願一仏乗」といい、「弘誓一乗海」と顕揚する。如来の誓願によって群萌の上に成就する広やかな無上仏道、このように了解することのできる親鸞におけるこの仏道の顕揚は、もとより法然興隆の真宗、すなわち念仏往生の仏道を継承し呼応しつつ、それをさらにさらに根源化した知見である。この根源化の立脚地は、前述した名号の意味把握にほかならず、それによって「乗彼願力」によって実現する「往生」が、真実功德を依止とする生、すなわち「現生正定聚」に内実化されると共に、この正定聚の機に生きたる生の意味が、「煩惱を具足しながら無上大涅槃にいたるなり」と、極めて積極的に捉えられていたのである。親鸞のこの堂々たる信念こそ、「一仏乗」もしくは「一乗海」を内容づけるものであると同時に、それが「よろずの煩惱にしばらくして」生きる群萌に開示された大般涅槃道として、まさに「無上仏道」と顕揚されるに値いするものであることを、見事に根拠づけているのである。

大切なことは、このような誓願一仏乗としての浄土真宗を、そこにおいて成就する「一乗の機」である。あるいはこの一乗の機において成就する誓願一仏乗の、ダイナミックスである。

しかるに一乗海の機を案ずるに、金剛の信心は絶対不二の機なり。知るべし。(真宗聖典二〇〇頁)

と述べて、「行巻」は金剛の信心において絶対不二の機、あるいは一乗海の機が成就することを明らかにする。そし

てその成就をさらに、

「海」と言うは、久遠よりこのかた、

凡聖所修の雑修雑善の川水を転じ、

逆誘闡提恒沙無明の海水を転じて、

本願大悲智慧真実恒沙万徳の大宝海水と成る、

これを海のごときに喩うるなり。

良に知りぬ、経に説きて「煩惱の氷解けて功徳の水と成る」と言えるがごとし。(真宗聖典一九八頁)

と、如来智慧海の所証である功徳大宝海のはたらきをもって、一乗海すなわち無上仏道の成就を自証し、かつ讃嘆するのである。私はその成就の光景について親鸞が掲げる教証について、その最後に引かれる『楽邦文類』の宗暁の一言が、いかにも具体的であり、ことに感銘深く響くのを感じる。

曇丹の一粒は鉄を變じて金と成す。真理の一言は悪業を転じて善業と成す。(真宗聖典一九九頁)

よく変成し転成するもの、それこそ真理の一言である本願の名号のはたらきそのものである。名号のこの転成するはたらきを、「総序」は周知のように「円融至徳の嘉号は、悪を転じて徳を成す正智」と、『楽邦文類』に呼応しつつ堂々と顕揚する。この言葉において宗暁が「悪業」といい、ことに「鉄」という譬えをもって、一乗海を実現する「真理の一言」のはたらきを受ける「機」を語っているところに、私は強く心惹かれるのを感じるのである。

「鉄」というこの言葉は、私に直ちに「瓦礫」という言葉を想起せしめる。もちろん親鸞が『唯信鈔文意』において、無碍光仏の広大智慧の名号を信樂することによって、煩惱を具足しながら無上大涅槃にいたると顕揚する誓願の一仏乘において、よくその大道に立つものを「石・瓦・礫のごとくなるわれら」と表白する、その「瓦礫」である。

その時この言葉はさらに、『唯信鈔文意』の語るこの了解の所依となった、法照の『五会法事讚』に収められている

慈悲の偈を、はるかに想起せしめるのである。

彼仏因中立弘誓 聞名念我総迎來

不簡貧窮將富貴 不簡下智与高才

不簡多聞持淨戒 不簡破戒罪根深

但使回心多念仏 能令瓦礫變成金(真宗聖典一八一頁)

この文は早く法然の『選択集』に引かれ、さらに聖覺の『唯信鈔』に引かれ、当然親鸞の『唯信鈔文意』において極めて独創的な了解が開顯される所依となり、そして「行巻」に引かれて「大行」を証しする歴史的教言として、耳を澄まして聞かれている。このように、もと中国浄土教の祖師によって本願の機を凝視しつつ、それをいかにも具体的に浮彫りするような確かさをもって語られた「瓦礫」という一言が、日本浄土教の祖師達によってその具体性を保持しながら、より根源化して了解されつつ一貫して伝承され、やがて親鸞によって無上仏道の機を表わす言葉として決定的ともいえる意味を見い出されてきたことに、私は深い感慨を禁じ得ない。誓願一仏乗もしくは弘誓一乗海とは、本願の仏道の積極性を見事に表わす極めて洗練された思想的言葉である。しかしながらそれについて親鸞がその教証として引文した最後の一文、「変鉄成金」によって、誓願一仏乗とは決して教義学的関心に立ってのみ了解されるべきものではなくて、むしろその具体的現実相に重大な意義のあることを親鸞が注意していることが、俄然浮彫りになってくるのである。

慈悲の偈は、弘誓の摂取の平等性を見事に告知している。その際、回心と共に帰入する念仏が、瓦礫として生きる者をよく金と変成する功德をもつと語られるのであるが、その念仏を「聞名念我」の願心に根拠をもつものと捉えたのは、何という見事な了解であろうか。その「聞名念我」の弘誓がまさに摂取しようとするものは、あらゆる衆生であって、貧窮の中に生きる者と、富貴の身を恵まれて生きる者とを区別することはない。このように弘誓の摂取の平

等性を鮮明に浮彫りにして、この偈はいささかの曖昧さもない。けれどもこの弘誓による平等の撰取を語る慈愍が最後にいたって、本願の念仏の功德を受ける機を「瓦礫」、すなわち石・瓦・礫のように生きる者と凝集したところに、弘誓としてはたらく大悲は、瓦礫の如く生きる者にことに深いという、極めて意味深い了解が、慈愍の真意として託されているように思われてならない。

この点に注目して、大悲の平等性を見事に浮彫りにしたのは、法然であった。法然は周知のように『選択集』本願章において、

何が故ぞ第十八の願に、一切の諸行を選び捨てて、唯だ偏に念仏の一行を選び取りて、往生の本願となしたまうや。(真聖全一・九四三頁)

という問いを立て、それに答えるのに勝劣・難易の義をもってするのであるが、その中で本願の聖意を推求して、次のような問いにも深い願心の大悲性を尋ね当てたのであった。

念仏は易きが故に一切に通じ、諸行は難きが故に諸機に通ぜず。然れば則ち一切衆生をして、平等に往生せしめんがために、難を捨て易を取りて本願となしたまうか。

若しそれ造像起塔をもって本願となしたまわば、則ち貧窮困乏の類は定んで往生の望みを絶たん。然るに富貴の者は少なく、貧賤の者は甚だ多し。(中略)

然れば則ち弥陀如来、法蔵比丘の昔、平等の慈悲に催されて、普く一切を撰せんがために、造像起塔等の諸行をもって往生の本願となしたまわず、唯だ称名念仏の一行をもって、その本願となしたまえり。(真聖全一・九四四頁)

このように大悲の願心を推求する法然は、まさにその大悲は「貧窮困乏の類・愚鈍下智の者・少聞少見の輩・破戒無戒の人」にことに深いと、深い感銘なくしては聞くことのできない、極めて独自の大悲の平等性を開顕したのである。

そしてその教証として法然は、『五会法事讚』に引かれる慈愍の前述の文を掲げるのであった。そのいわゆる「瓦礫」を、法然は同時代の凡夫として生きる者の具体相である「貧窮困乏の類」に擬視し、これをもって大悲の本願がまさりに立たしめようとする念仏往生の仏道の機と、見定めたのである。

### 三

法然のこの了解を継承しそれに呼応して、聖覚は法然與隆の念仏往生のころを、次のように確かめていく。

つぎに第十八に念仏往生の願をおこして、十念のものをもみちびかんとたまえり。まことにつらつらこれをおもうに、この願、はなはだ弘深なり。名号は、わずかに三字なれば、盤特がともがらなりともたもちやすく、これをとなうるに、行住座臥をえらばず、時処諸縁をきらわず、在家・出家、若男・若女、老・少、善・悪の人をもわかず、なに人かこれに、もれん。(真宗聖典九一九頁)

こうして聖覚の『唯信鈔』は、いまの慈愍の「彼仏因中立弘誓」の文を引くのである。この引文を解説する親鸞の『唯信鈔文意』は、慈愍が「貧窮・富貴」、「下智・高才」、「多聞持淨戒・破戒罪根深」と表わす弘誓の機を全て包摂するような意味で「瓦礫」と捉えつつ、それに対して「聞名念我総迎來」と願いつつ続つて弘誓の実現する仏道を、「但使回心多念仏、能令瓦礫變成金」と語り表わすその一言に注意して、そのころを次のように開顯したのであった。

「但使回心多念仏」というは、「但使回心」は、ひとえに回心せしめよということばなり。「回心」というは、自力の心をひるがえし、すつるをいうなり。実報土にうまるるひとは、かならず金剛の信心のおこるを、「多念仏」ともいうなり。(真宗聖典五五二頁)

このように「回心」という意味深い出来事を明確に確かめつつ、その回心において開示される世界を、親鸞は堂々と次のように顕揚する。



自力のこころをすつというは、ようよう、さまさまの、大小聖人、善悪凡夫の、みずからがみをよしとおもうこころをすて、みをたのまず、あしきこころをかえりみず、ひとすじに、具縛の凡愚、屠沽の下類、無碍光仏の不可思議の本願、广大智慧の名号を信樂すれば、煩惱を具足しながら無上大涅槃にいたるなり。

具縛は、よろずの煩惱にしばらくられたるわれらなり。煩悩は、みをわずらわす。悩は、こころをなやますという。屠は、よろずのいきたるものを、ころし、ほふるものなり。これは、りようしというものなり。沽は、よろずのものを、うりかうものなり。これは、あき人なり。これらを下類というなり。

「能令瓦礫變成金」というは、(中略)かわら・つぶてをこがねにかえなさしめんがごとしと、たとえたまえるなり。りようし・あき人、さまさまのものは、みな、いし・かわら・つぶてのごとくなるわれらなり。如来の御ちかいを、ふたごころなく信樂すれば、撰取のひかりのなかにおさめとられまいらせて、かならず大涅槃のさとりをひらかしめたまうは、すなわち、りようし・あき人などは、いし・かわら・つぶてなどを、よくこがねとなさしめんがごとしとたとえたまえるなり。(真宗聖典五五二頁)

私は前に、誓願一仏乗の教証として親鸞が引いた、宗暁の「叢丹一粒変鉄成金」に注意した。「真理の一言」のはたらきを見事な譬えをもって語り表わした、この言葉に呼応する趣きをもって、慈悲は「但使回心多念仏 能令瓦礫變成金」と語った。その解説に託して語り告げられている、親鸞のこの堂々たる知見において顕揚されているもの、それこそ誓願一仏乗の具体相でなくて何であろうか。

そのような意味で、浄土真宗の積極的内実を顕揚する『唯信鈔文意』のこの一文の中で、その眼目となるものとは、  
とより、「一筋に、具縛の凡愚、屠沽の下類、無碍光仏の不可思議の本願、广大智慧の名号を信樂する」ところの、  
回心において開かれる一心帰命の純潔なる信であることは、一読おのずから明瞭であろう。あるいはこれを、その語り表わす言葉の独自の表現に即して、むしろ無碍光仏の誓願不思議、そして名号不思議の信樂と了解する方が、より

適切であるかも知れない。ここにここで「無碍光仏の广大智慧の名号を信樂する」と語り表わされている一心帰命の信の核心ともいふべきことは、本願の名号を信樂する心に、深広無涯底なる如来智慧海が開示されているという、驚くべき仏道の知見であることに、私は瞠目の思いを禁じ得ないのであるが、これこそが我々が心して聞くべき親鸞の仏道の知見の核心であることに注意しなければならぬと思う。そしてこれが第一節で述べたように、「極速円満す、真如一実の功德宝海なり」と表明された、不虚作住持功德の自証を踏まえた名号の意味把握、もしくは本願の行信の自覚するものの頤揚と同じ知見であることは、いうまでもない。

純潔に、無碍光如来の誓願不思議・名号不思議を信樂する者、それ故にこの誓願・名号の不可思議のはたらきに依って、煩惱を具足しながら無上大般涅槃にいたる主体を、親鸞が元照の『阿弥陀経義疏』の言葉に依りつつ、「具縛の凡愚・屠沽の下類」と浮彫りにしていることに注意しよう。そしてこれが「鉄」の、「瓦礫」の現実相であるにほかならない。そのような「具縛の凡愚・屠沽の下類」を、親鸞が「万の煩惱に縛られたるわれら」として、「石・瓦・礫の如くなるわれら」として表白する、その確かな覚悟の厳しさを思う。もとより「万の煩惱に縛られたるわれら」とは、本願の機の自覚相であり、「石・瓦・礫の如くなるわれら」とは、その具体相である。この本願の機は、親鸞のより深まった眼でみれば、「一乗の機」といわれるべきものであるが、この凡愚すなわち凡夫にして愚かなるもの現実が、圧倒的な濃密さをもって親鸞に迫ったのは、流罪の地北越で、行化の地関東で、その中に投げ出されて共に生活した「いなかの人々」、その只中においてであったに違いない。その「いなかの人々」とは、親鸞が深い感慨をこめて「文字のころもしらず、あさましき愚痴きわまりなき」と語るその人達にはかならず、その人々がこの世を生きる姿というか、社会生活の具体相が、早く元照がいい、いま『唯信鈔文意』が語る「屠沽の下類」である。「下類」といわれた「りようし・あき人」であるが、『歎異抄』はこれを周知のように、「うみかわに、あみをひき、つりをし、世をわたるもの、野やまに、ししをかり、とりをとりて、いのちをつぐともがら、あきないをもし、田畠をつく

りてすぐるひと」と、極めて具体的に語っている。このような「いなかの人々」すなわち辺境の生活者、しかもそれは親鸞の時代である中世初期の日本の生活者の大多数であるが、それを親鸞が「われら」として完全に自己と同一視したその自覚的立脚地にこそ、我々は注意すべきであろう。『歎異抄』がこの人々を挙げる文脈の中で、「ただおなじことなり。さるべき業縁のもよおせば、いかなるふるまいもすべし」と語ることから直ぐに知られるように、それは「そくばくの業をもちける身」、すなわち「宿業の身」の自覚そのものである。ここら辺りに、我々が力を尽して尋ね当てるべき、親鸞の信仰的自覚の凝集点の一つがあるのではなからうか。親鸞に学ぼうとする我々自身の主体性の自覚を促す問いかけとして、私にはこのことが頻りに思われてならない。

私は改めて思う。本願の機、すなわち如来の本願がまさに救おうとする人間、いやむしろその人間の苦悩の中からの祈りが、如来をして発願せしめたというべき本願の機が、早く『大無量寿経』において「群萌」と教説されたその意味深さを。

如来、無蓋の大慈をもって三界を矜哀したまう。世に出興したまう所以は、道教を光闡して、群萌を拯い恵むに  
眞実の利をもつてせんと欲してなり。(眞宗聖典八頁)

この「群萌」に感応するかのように、浄土の祖師たちはそれぞれが独自の言葉をもって、本願の機を表白した。宗暁は「鉄」といい、慈愍は「瓦礫」といった。元照は「具縛凡愚・屠沽下類」といい、法然是「貧窮困乏之類・愚鈍下智者・少聞少見輩・破戒無戒人」と表白した。ここに大悲の眼の伝統があり、大悲の仏道の歴史がある。この伝統の中から、親鸞の「一乗の機」の知見が開かれてきたのである。

#### 四

『大無量寿経』に「眞実教」を聞き開いた親鸞は、その『大経』の大意を次のように顕揚した。

弥陀、誓いを超発して、広く法蔵を開きて、凡小を哀れみて、選びて功德の宝を施することをいたす。

釈迦、世に出興して、道教を光闡して、群萌を拯い、恵むに眞実の利をもってせんと欲してなり。(眞宗聖典一五二頁)

この眞実教に値遇した人、すなわち眞実教に發遣せられて回心と共に大悲の願海に歸入する人は、必ずや自己を「凡小」とし、「群萌」と自覚することとなる。「凡小」とは「具縛の凡愚」にほかならず、親鸞のより深まった自覚でいえば「そくばくの業をもちける身」、すなわち宿業の身を生きる者の自覚である。「群萌」とは「屠治の下類」にほかならないのであるけれども、眞実教に値遇した願海回入の一心が、自身を「そくばくの業をもちける身」と信知するその自覚が、群萌を「われら」とする覚悟を生み、まさにその群萌を本願の機と信頼しつつ、// 共に// の広やかな世界を開いてくるのである。

この眞実教の宗体を、親鸞の慧眼はよく知られているように「如来の本願を説きて、經の宗致とす。すなわち、仏の名号をもって、經の体とするなり」と見定めた。この名号の現実態である「称無碍光如来名」の深義が、「極速円満す、眞如一実の功德宝海なり」と捉えられたところに、前述したような親鸞の仏道了解の獨創性があるのであるが、その時如来の本願を説くこの教説は、よく「本願一乗海」を開顯する教説として、「絶対不二の教」という積極性においてその意義が顕揚されることとなったのである。そしてこのことに相應して、この絶対不二の教に歸して獲得された信心、いわばこの教説の内面化した自覚ということのできる金剛の信心がまた、「絶対不二の機」として、本願一乗海をそこに実現する極めて積極的な意義をもつこととなったのである。本願の仏道の積極性が、本願一乗海すなわち誓願一仏乗として捉えられることに相應して、本願の機もまた一乗海の機という独自の意味をもつものとして、極めて深い次元において了解されてくる。

「行巻」は一乗海の機について、信疑対・善惡対・正邪対・是非対・実虚対・眞偽対・淨穢対・利鈍対・奢促対・

豪賤対・明闇対の十一対をあげて対論しつつ、

しかるに一乗海の機を案ずるに、金剛の信心は絶対不二の機なり。(真宗聖典二〇〇頁)

と明かす。それは一乗海の機が、信乃至は明の徳においてあるというよりも、金剛の信心において疑乃至は闇なるものが破し転ぜられるというダイナミックなあり方において、絶対不二の機が成就することをいおうとするものではないであろうか。その成就がすでにみたように、あるいは「変鉄成金」といわれ「転悪業成善業」といわれ、あるいは「能令瓦礫變成金」といわれ、さらに「煩惱を具足しながら無上大涅槃にいたる」といわれる、驚くべき転成の出来事であり、そしてよく転成するものが「真理の一言」であり、「円融至徳の嘉号」であり、そして「無碍光仏の不可思議の本願、広大智慧の名号」の信楽なのであった。

誓願一仏乗なる仏道において真に問題であるのは、この「転成」という出来事である。真理の一言に帰し、無碍光仏の不可思議の本願を信楽する時、何故に「能令瓦礫變成金」の、「不断煩惱得涅槃」の「転成」が実現するのか、ということである。道理としてこれをいえば、すでに尋ねたようにそれは、一念喜愛の心に開示せられた、それ故にその信楽に受用せられる安楽浄土の莊嚴功德、ことにも不虛作住持功德に由る。このことはすでに反復確かめた通りである。だから真に問うべきことは、本願力に値遇し、挙身の回心において如来の不虛作住持功德を深々と自証するという時、その行者の内面にいかなる出来事が起きたのか、ということである。

真理の一言というべき本願の名号を獲得した自覚、その表白を「称無碍光如来名」と「行巻」は語るのであるが、この「称名」について親鸞は直ちに「撰諸善法、具諸徳本」という。この「諸の善法」を法蔵菩薩所修の五念門と解し、「諸の徳本」を五功德門と解すべきであるとは安田理深の了解であるけれども、師のこの了解に従うならば、親鸞は「称無碍光如来名」する一心帰命の信の背景に、菩薩法蔵の発願と永劫の修行を内感し、また一心帰命の信の端的に、その功德の施与を感得していたに違いない。この覚知が、信心は如来清浄の願心の回向成就であるとの信知を

生み、また信心は浄土の法味樂を受用するとの自証を展開するのである。この受用が自己の虚仮不実性を浮彫りにする挙体の回心懺悔を踏まえた時、その最も意味深くかつ根源的な浄土の功德として、本願力に帰した身に真如一実の功德が回施せられるとの自証である不虚作住持功德に凝集して、深く深くうなずかれることになったのではあるまいか。この如来の不虚作住持功德の自証の内面、それ故にあの驚くべき転成の内面を自覚化し開顯した思索こそ、「信巻」に展開する至心なる願心の推求ではなかったであろうか。

この至心はすなわちこれ、至徳の尊号をその体とせるなり。(真宗聖典二二五頁)

と親鸞はいう。本願の名号を具体的場として、如来の至心すなわち「真実心」ははたらくという。それは、本願の名号に帰した端的に、換言するならば、一心帰命の信を獲たその端的に、われらが無始以来「穢惡汚染・虚仮諂偽」の只中であつたことをえぐり出し浮彫りにしつつ、如来の真実心ははたらくことが、生来初めて自覚されるというのであるだろうか。

この自覚を突破口として、親鸞の至心なる願心の推求は進む。この穢惡汚染にして虚仮諂偽なるものという、重くして鋭角的な問題性を内包してある群萌、それを招喚しそれを撰取しようとする大悲の願心の推求において、この群萌は実に「苦惱する群萌」というほかはない重さにおいてあることが浮彫りになっている。親鸞が至心釈において「一切苦惱の衆生海を悲憫して」といい、信樂釈において「苦惱の群生海を悲憫して」といい、さらに欲生釈において「一切苦惱の群生海を矜哀して」というその願心の了解を、誰が感銘なくして聞くことができようか。反復尋ねた本願の機たる凡小・群萌は、その全体がいいようもなく深い苦惱の中にある。この苦惱が大悲として如来と感応し、敢えていえば如来をして発願せしめるのだ。親鸞はこのように大悲の願心を確かめているように、私には思われてならない。この一切苦惱の群生海の現実相は、まさしく如来の願心を「大悲心」として推求する信樂釈に、「無明海に流転し、諸有輪に沈迷し、衆苦輪に繫縛せられて」あるものとして、いかにもリアルに凝視されている。その苦惱する

群萌が至徳の尊号に帰した端的に、

一切の群生海、無始よりこのかた乃至今日今時に至るまで、穢悪汚染にして清浄の心なし。虚仮諂偽にして真実の心なし。(真宗聖典二二五頁)

と明確に覚知される。この覚知によって、群萌として生きる者はそのまま、より深まった意味で「凡小」として自覚されることとなるのであるけれども、万劫の初事というほかはないこの懺悔に立つからこそ、如来の願心が「真実心」として深く自証せられるというべきであろうか。

この懺悔に立って、親鸞は如来の真実心を力を尽くして推求する。

(一) ここをもって如来、一切苦悩の衆生海を悲憫して(如来の発願)、

(二) 不可思議兆載永劫において、菩薩の行を行じたまいし時、三業の所修、一念・一刹那も清浄ならざることなし、真心ならざることなし(永劫の修行)、

(三) 如来、清浄の真心をもって、円融無碍・不可思議・不可称・不可説の至徳を成就したまえり(功德の成就)、

(四) 如来の至心をもって、諸有の一切煩惱・悪業・邪智の群生海に回施したまえり。すなわちこれ利他の真心を彰す(功德の回施)。(真宗聖典二二五頁)

これに続いて親鸞は、その教証として『大経』勝行段の教説を引くのであるけれども、この推求の眼目はいうまでもなく(四)の功德の回施にある。「令諸衆生功德成就」と教説されるその如来の功德の回施にあずかればこそ、我らはその根深い自力の執心を破られ砕かれて、自身を「煩惱・悪業・邪智の群生」と自覚し、「穢悪汚染・虚仮諂偽」と懺悔するのであり、このような懺悔の現実こそが、如来の功德の回施の事実にはかならない。そしてまたこの懺悔に立つからこそ、「円融無碍・不可思議・不可称・不可説の至徳」と讃嘆される無上涅槃の功德が、「真実功德」と表白されることともなるのである。

渾身の力をふるって親鸞が如来の願心に尋ね入ったこの「真実心」の推求に思いをひそめて、これが「如来の本願力」のはたらきそのものである不虛作住持功德の、親鸞における自証の内面の開顯という意味をもつ思索であることに思い至って、私は感嘆の念を禁じ得ない。「観仏本願力 遇無空遇者 能令速満足 功德大空海」とは、世親の教説である。『無量寿経』の教説に依って世親自身が自証した本願力の功德についての、明確なる告知である。その眼目は本願力に値遇した者に、速かに如来の功德を満足せしむるところにあり、これが前引の『大経』の「以大莊嚴具足衆行、令諸衆生功德成就」に応答するものであることは、改めていうまでもなく明らかである。この功德の満足こそ、前節で反復考察した「変鉄成金」の、「能令瓦礫變成金」の、その「転成」の根拠である。その世親の自証の世界に、親鸞は「真宗興隆の大祖源空法師」の教説との値遇を縁として獲得した、全く同質の本願力への帰入の出来事を通して帰入した。そしてそこに体験せられた「回心懺悔」に立って、よく回心せしめたものを如来の清浄・真実心と自覚し、この真実心としてはたらく「真実功德」を力を尽くして推求し、遂に「真如一実の功德」と自証するに至って、それを無上大涅槃の功德と深々と、そして確かに信知することとなったのである。こうして親鸞は堂々と、あるいはむしろ「我が信念」として、無上大涅槃の功德を語って遲慮することはない。しかしながらその時、真如一実の功德を、円融無碍・不可思議・不可称・不可思議の至徳を讃嘆するその身に、穢悪汚染の、虚仮不実の懺悔が常に動き、そして踏まえられていることを、われわれは決して見落してはならないと思う。

ともあれ、本願力との値遇において自証したものを、親鸞は世親の不虛作住持功德を語る説教に依って、ここまで自覚化していった。その眼目は、円融無碍の清浄真実なる無上大涅槃の功德の回施にある。この自覚的事実こそ、親鸞が誓願と名号のはたらきを、「不思議」という言葉を添えて、誓願不可思議・名号不思議と表明する、その「不思議」の内実にはかならない。こうして「行巻」のあの堂々とした誓願一仏乗の顕揚が表明せられることとなる。

敬いて一切往生人等に白さく、



弘誓一乘海は、無碍、無辺、最勝、深妙、不可説、不可称、不可思議の至徳を成就したまえり。

何をもつてのゆえに、誓願不可思議なるがゆえに。(真宗聖典二〇〇頁)

このようにして誕生する「真理の一言」に帰した存在の積極性を、私は「眞実功徳を依止とする生」の施与と了解した。この施与において、一乗海の機は成立する。それはそのまま、大悲の本願の機である凡小とし群萌として生きる者が、乃至は具縛の凡愚、屠沽の下類として生きる者が、あるいはまた瓦礫として生きる者が、その存在の全体を挙げて如来の眞実功徳の中に生きる身に転成することにほかならない。この転成において群萌は、一乗海の機という光栄と根源性をもつものと成るのである。その時群萌として「無明海に流転し、諸有輪に沈迷し、衆苦輪に繫縛せられて」、虚偽と苦悩の中に喘いできた者は、その身の秘める暗黒の問題性として「逆誘闍提恒沙無明」の生であることを初めて深く深く懺悔し、その救いを求めてなす行為の全てが「虚仮邪偽の雑修雑善」であることを、初めて覚知することとなる。その生の全体を、本願力は「本願大悲智慧眞実恒沙万徳」の、溢れるような輝かしさの中にある生に転成していくのである。親鸞が獲得した一無碍道の面目はここに輝くと、我らは仰ぐべきではなからうか。